

北陸石仏の会々報

第76号

令和8年4月15日発行

編集と発行

北陸石仏の会

(日本石仏協会北陸支部)

代表 平井一雄

〒939-1315

富山県砺波市太田

1770 尾田武雄方

電話 0763-32-2772

振替 00740-2-11974

(年会費 3000 円)

ホームページ

<https://hokuriku-sekibutsu.com>

- ・大川寺の庚申塔と疫神社
- ・井波石工 岩崎
- ・旧能美郡の安政四年石塔
- ・第69回例会報告
- ・第70回例会案内

旧大山町大川寺参道の庚申塔と疫神社石塔

平井 一雄

1, 「庚申塔」

富山県旧大山町上滝線大川寺公園裏から大川寺に向かう茂みの中に、ひっそりと庚申塔が建てられている。この庚申塔は一面六臂青面金剛像で足元に二邪鬼を、台座に三猿を配し、左手下部にはショケラを持つ、船形光背の典型的な庚申塔である。二鶏は無いようだ。『大山町の石仏第一集路傍の石仏(大山・上滝地区)』には尊名「青面金剛」高さ100cm 幅48cmと書かれている。

○別記「庚申講」参照

2, 「疫神社」石塔

この庚申塔の左前に明治二年銘の「疫神社」の碑が安置されている。板碑型の「疫神社」の碑は、十九世紀初頭に世界的流行病となり、日本でも猛威をふるった疫病(コレラ)の終息を願って建てられたものと考ええる。富山県内では、安政五(1858)年に飛越大地震が発生したことなどが原因で、人々の生活環境、衛生環境の悪化等によりコレラが大流行した。致死率が高く、発症後に二三日で死に至ることから「三日コロリ」と恐れられ、この地域で

も多くの死者が出たという。疫神社の碑は、人々が死者への供養と生者の安寧を祈った痕跡であろう。

笠塔婆型で同銘の「疫神社」石塔は富山市太田地区にもある。

この石塔には建立年号などの銘文はないが同時期ものだと考える。

参考文献

- ・前田英雄「飛越地震記録にみられる被害とコレラの蔓延」(大山歴史民俗研究会『大山の歴史と民俗 第12号』2009年)
- ・前田英雄「コレラ流行の歴史」(富山民俗の会『とやま民俗』2010年)

○庚申講とは

庚申講は霊的存在の三戸(さんし)の虫が庚申の日、天に昇って人の善悪を、天帝(梵天・帝釈天)に告げるので、六十日毎に一昼夜眠らず慎んで過ごしたら寿命が延びる。またこの夜、夫婦の交わりをしたら頑迷な子が生まれ、必ず盗人になるというのでそのようなことはしない。庚申講はそれを守るための信仰と共同体の行事です。

体内の三戸(さんし)の虫のいわれ

上戸(じょうし)は頭にすむ黒虫で、頭欲や怒りを起こさせ、人の命を短くする。中戸(ちゅうし)腹にすむ青虫で、胸・腹食欲・色欲を強め、人の気を弱くする。下戸(げし)は脚にすみつけ、心のやまいを引き起こす白虫で、人の果報を奪い地獄におとそうとする。これは中国で二、三世紀、道教徒に広まった信仰である。日本では特に江戸時代に民間信仰として大流行し、



大川寺参道 庚申塔・疫神社



疫神社 明治二己巳歳七月■

青面金剛（しょうめんこんごう）信仰と結びつく「大青面金剛呪法」によって、青面金剛を主尊とした。青面金剛像は三面六臂像で、剣・矛・矢・弓・ショケラ等を持ち、足の下に邪鬼を踏まえ、周りに、日・月・鶏を配す。猿田彦も主尊にされた。申は猿に通じ、猿はまた日枝社（山王社）の使いとされていることから、山王信仰と結びついたのである。庚申軸に「天津祖庚申猿田彦太神」と書き猿田彦太神の絵像が描かれている。やがて青面金剛像の台に、口・目・耳をふさぐ三猿を彫るようになった。悪いことは何も見ず、言わず、聞かずにしておれば自分の身を守れるという人生訓で、身に巣くう三匹の虫にも、そのようにしてもらいたいとの願いがこめられている。庚申講中は、一年に六度の庚申の日、当番の家へ集まって、庚申軸に花と水を供えこ詠歌を唱し、団子を食し茶をすすって、次の家へ軸を廻した。講を続けて六〇年目に目的をとげたとして、庚申塔を造立して記念とした。

庚申講の例として富山市西番地区では正源寺を中心に、七軒の講中が当番の家へ集まる。先ず入浴潔斎して庚申様に祭供を設け、お経をあげて一晩中寝ずに語り明かし、朝方またお経をあげてきた。家門繁昌・五穀豊穰・病息災・子孫長久を祈った。

参考図書 『太田郷土史』



西番の庚申掛軸

参考資料



太田地区地藏堂・疫神社

井波石工 岩崎弥三郎・弥吉

尾田 武雄

岩崎弥三郎

明治四十四年から大正二年にかけて制作されている。聖観音三体、狛犬二対であり、弥吉と同時代に活躍された。

岩崎弥吉

大正六年から昭和五年にかけて、狛犬、地藏、如意輪観音、不動明王、忠魂碑とバラエティーに富む制作である。南砺市高宮の古宮にある不動明王立像は庄巻の作である。

富山県南砺市北川（旧井波町）には旧井波町の東側に多くの石工がいて石屋町といわれていた。中心部には大谷川が流れ、その上流は閑乗寺台地の奥まった南斜面に字石山があり、石切場があった。切り出した石材はこの川により運ばれたのである。石仏や石臼、根太石、墓石などに加工されていた。享保一八年（一七三三）加賀藩は石山希望者に百五十匁の役銀とひきかえで採掘させた。以後採掘権は、特定の人と与えられ売買の対象になった。（町中末々困窮に付助成願書三十頁『井波町史下巻』一一三頁）延享元年（一七四四）には砺波市三合新にある千光寺石塔に「石工井波善太郎」と刻字がり、同五年（一七四八）南砺市高宮には「石仏出来開眼井波石屋作」（『医王は語る』三八七頁・福光町法船寺文書）文化三年（一八〇六）「石工四人御座候」（井波肝煎文書）とあり、同七年（一八一〇）石山の採掘者は、甚右衛門、かじ屋又兵衛、義右衛門、清次郎、平蔵、がある（井波肝煎文書）その後北川村には十軒ぐらいの石屋があったとされる。

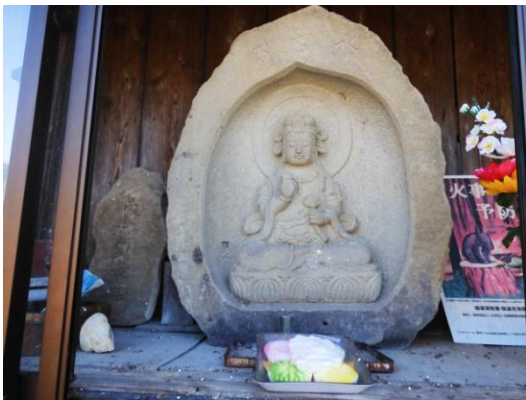
井波石工については、常川関係一族、七次郎につて「北陸石仏の会々報」で報告してきた。今回は「岩崎」を名乗る石工について報告したい。石造物に「岩崎」の刻字があるのは十二体を調査した。その内「岩崎弥三郎」が五体、「岩崎弥吉」が七体である。（別表参照）

これら岩崎弥三郎と弥吉は明治後半から昭和前半の同時代に活躍した石工である。明治三十九年八月に内務大臣原敬のもとで勅令「神社寺院仏堂合併跡地贈与ニ関スル件」を発して、神社合併を積極的に奨励した。これを受けた府県では、原則として村ごとに一村社、無格社（大字）ごと一ないし数社に減らす方針を強行した。各村々では合祀が進められた。ちなみに富山県東砺波郡太田村（現砺波市太田）には巖島社が大正五年に住吉社の合祀、同年に諏訪社が八幡社に合祀された。住吉社と八幡社は、大正五年に八幡社に合祀され、社名を住吉神社となった。この大正五年に神社の社標、根太石、燈籠、石畳等が整備された。このように石造物の需要が拡大していた。また井波閑乗寺周辺からも石材が多く採掘されていた。

井波石に関しては古川知明著『井波山石切場関連調査報告書』（富山石文化研究所刊2017）がある。これは井波石に関する決定版の趣があり、石切場の位置や石工の関りなど詳しく述べられている。「資料 井波町肝煎文書関係分翻刻」の「私義井波町惣持山之内請地石切場所是迄世話いたし来候得共不勝手之義有之右場所譲渡申定書証文之事」（『商工業 一三六〇号①文書』）には、安政二年十月に北川村弥三郎の名が出てくる。この弥三郎が岩崎弥三郎と関りがあると思われる。

岩崎弥三郎と岩崎弥吉銘の石造物

番号	石工銘	種類	造像年	所在地
1	石工 井波弥三郎作	聖観音	なし	砺波市原野
2	井波 石工弥三郎	狛犬	明治44年8月26日	南砺市高儀 神明社（福野町）
3	井波 石工弥三郎	狛犬	明治45年春	南砺市野新 神明宮（福野町）
4	作人井波岩崎弥三郎	聖観音	大正2年10月	砺波市太田西区
5	作人井波岩崎弥三郎	聖観音	大正2年8月17日	南砺市安居 安居寺（福野町）
6	石工 井波岩崎弥吉	狛犬	大正6年	南砺市桐木 神明宮（福野町）
7	井波町石工岩崎弥吉	狛犬	なし	南砺市沖（井波町）
8	井波 岩サキヤ吉	如意輪観音	大正10年6月2日	砺波市伏木谷
9	井波町石工岩崎弥吉	戦没碑	明治42年	南砺市末松（城端町）
10	作人井波岩崎弥吉	不動明王	昭和5年	南砺市高屋古宮（井波町）
11	作人井波岩崎弥吉	十一面観音	なし	砺波市荒高屋
12	作人井波岩崎弥吉	如意輪観音	昭和3年11月20日	南砺市沖（井波町）



①砺波市原野 聖観音



②南砺市高儀 神明社 狛犬



③南砺市野新 神明宮 狛犬



④砺波市太田西区 聖観音



⑤南砺市安居 安居寺 聖観音



⑥南砺市桐木 神明宮 狛犬



⑦南砺市沖 狛犬



⑧砺波市伏木谷 如意輪観音



⑨南砺市末松 戦没碑



⑩南砺市高屋古宮 不動明王



⑪砺波市荒高屋 十一面観音



⑫南砺市沖 如意輪観音

旧能美郡の安政四年石塔

滝本 やすし

はじめに

石川県旧能美郡（現在の能美市と小松市北部）に、石祠に納められた地蔵と安政四年銘の石塔が並んでいるものをこれまでに五例確認している。手取川と梯川との間の限られた地域に集中している。石塔の石材は小松市で産出される原石とみられるが、石祠や地蔵は異なるものもあるようだ。

①能美市三道山町路傍 「カ・地持地蔵／安政四年」

三道山古墳の麓に、地蔵と石塔とが並んで建てられている。石祠内に納められている地蔵は持物を確認できないが、地持地蔵であろうか。

角柱型の石塔の正面中央に「地持地蔵」と刻まれており、その上には種子「カ」が刻まれている。右側面に「安政四年」と刻まれている。

②能美市寺井町山道地蔵堂 「カ・金剛寶地蔵／安政四年」

寺井町の路傍に木造の堂が建てられており、地蔵が納められている。右手が与願印で、左手は錫杖を持つていているようである。放光王地蔵であろうか。堂の手前に石祠と石塔が建てられているが、石祠の中は現在は空で、堂内に納められている地蔵はもとはこの石祠の中に納められていたものである。

角柱型の石塔の正面中央に「金剛寶地蔵」と刻まれており、その上には種子「カ」が刻まれている。不鮮明で読みづらいが、右側面に「安政四年」と刻まれている。

③小松市河田町路傍 「イー・下品中生／安政四年」

上河田バス停横に、地蔵と石塔とが並んで建てられている。石祠内に納められている地蔵は、両手で念珠を以っており、地持地蔵とみられる。

角柱型の石塔の正面中央に「下品中生」が刻まれ、その上には種子「イー」が刻まれている。右側面に「安政四年」と刻まれている。

④小松市能美町共同墓地 「イー・下品下生／安政四年」

共同墓地入り口に、地蔵と石塔とが並んで建てられている。石祠内に納められている地蔵は、右手が施無畏印、左手が引撰印であり、陀羅尼地蔵とみられる。

木造の堂内に角柱型の石塔が納められており、正面中央に「下品下生」と刻まれている。堂内が暗く、はっきりとしないが、その上には「イー」とみられる種子が刻まれているようだ。右側面に「安政四年」と刻まれている。

⑤小松市千代町共同墓地 「イ・鶏龜地蔵／安政四年」

共同墓地入り口の六地蔵のとなり、地蔵と石塔とが並んで建てられている。六地蔵は平成十八年に作られたものであるが、隣に建てられている地蔵は、それ以前からこの場所にあった。石祠内に納められている地蔵は、右手に錫杖、左手に宝珠を持つており、鶏龜地蔵とみられる。

角柱型の石塔の正面中央に「鶏龜地蔵」と刻まれており、その上には種子「イ」が刻まれている。右側面に「安政四年」と刻まれている。

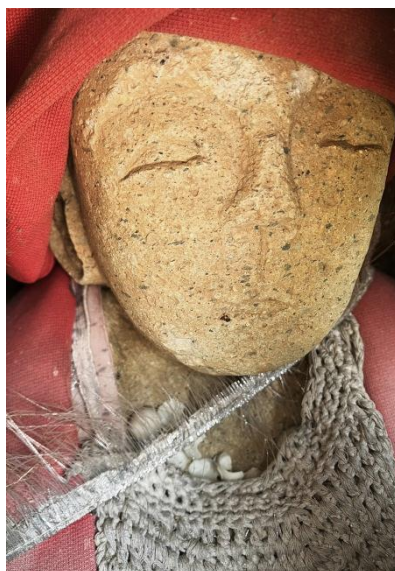
おわりに

手取川は古くから幾度も氾濫をくり返し、大規模な災害が発生している。当初は安政二年の洪水の犠牲者の供養として建てられたのかと考えた。しかし、その年の洪水の際には手取川右岸地域での被害が大きかったが、手取川左岸から梯川右岸にかけては大きな被害はなかったようである。疫病の流行なども確認できない。

安政四年銘の五基の石塔は同じ様式であるが、石祠と地蔵は若干の相違がみられる。石塔と同時に造立されたのか不明である。

共同墓地に二例を確認しているが、安政四年当時には共同墓地はなかった。このような石塔が路傍に建てられることも考えづらく、当初は各集落にあった火葬場に建てられたのではないかと考えられる。地蔵も同時に火葬場から移設されたのであろうか。

近隣地区にも同様の作例がないか追加調査を行ったが、今のところ他には確認していない。



①能美市三道山町 路傍



②能美市寺井町 山道地藏堂



③小松市河田町 路傍



④小松市能美町 共同墓地



⑤小松市千代町 共同墓地

第69回例会報告

加賀の逆立ち狛犬に出会って

桑久保紀代子

初めて北陸石仏の会の見学会に参加しました。滝本さま尾田さまのご案内のもと「加賀逆立ち狛犬めぐり」を堪能させていただきました。北陸石仏の会の皆さまには心のこもったご準備と暖かい歓迎をいただき、とても心地よく過ごさせていただきました。ありがとうございました。

実際に間近で見る逆立ち狛犬は皆個性的で、伸びやかなフォルム、精緻で美しい巻き毛、重力を忘れさせるほどの軽やかさと勢いがありました。中には台座から落ちたままの狛犬もいて、能登地震の爪痕を目の当たりにしました。

見学先の各所では、戸室石、笏谷石、滝ヶ原石をはじめとする北陸の名石がふんだんに使われ、豊かな石の表情を楽しみました。他の産地の石がどのように流入したのかを想像するのも楽しく、石の文化圏の広がりを感じました。金木犀の香りに包まれた秋の金沢で、狛犬と石、そして人の営みを感じる充実した一日となりました。



野々市市下林薬師日吉神社にて記念撮影（明治28年、石工：福嶋伊之助）